

## 「女言葉」と『金枝篇』

## ■ズールー人と人名のタブー

『タブーと靈魂の危難』（『金枝篇』第2部）第6章「タブーとなる言葉」の第4節「王と他の神聖な人物のタブーとなる名前」に取り上げられた世界各地の断片的な事例の中でも印象深いのが、南アフリカのトランスバールに住むズールー人の次のような慣行である。

ズールーには、各部族（tribe）の首長についても、また民族（nation）全体を統治する王についても、その名前を危害から守るための厳重なタブーがある。しかも、それは首長や王の父系親族と先祖にも拡大して適用される。

フレーザーは、ズールー人首長の名前に含まれるのと同じ語や音が似ている語のタブーについて、ズング、ドウワンドウェ、クヌマヨの3部族の例を引いている。ズング部族の場合、*enhlela*（道）→*inyatugo*、*manzi*（水）→*mata*、*umkondo*（槍）→*embigatdu*、*tshanti*（草）→*inkosta* と言い換えた。それは、当時の首長が *Umfan-o inhlela*、その父が *Manzini*、祖父が *Imkondo*、曾祖父が *Tshani* だったからである。また、王についていえば、*Panda* 王のゆえに *impando*（木の根）が *nxabo* に、高名な *Cetch-wayo* 王のゆえに *amacebo*（嘘）が *amakwata* に変えられた。

女性は特に規範の遵守を厳格に求められ、関連性がずっと希薄な語ですらこの種のタブーの対象となった。王族の妻たちは、王ばかりか、王の何代にもわたる父系親族・先祖の名前を問題にするので、実際、王邑に住む彼女たちの言葉は往々容易に理解しがたいほどだった。

部族・民族次元のタブーに加えて姻族次元のタブーが絡むので、全体の事情は益々複雑になる。だから、ズールーの各部族が固有の語彙を、また女性たちが特有の言葉をもつことになった。

しかも、女性たちの語彙は姻族次元のタブーのゆえに血縁的な村ごとにずれて行く。こうしてズールー語は二重言語の観を呈し、各語には3つ4つの同義語があり、しかも部族の交流によってどれもがズールー全土で知られていた [Frazer, J. G., *The Golden Bough*, 1913]。

## ■ケレウエの「女言葉」

以上から、人名のタブーをめぐるズールー人の事情は、前回紹介したコーサ人のものにきわめて近いが、強大な王の存在によって一層複雑になっていることが窺える。ただ、ズールーの二重言語状態については、コーサの「女言葉」（*Ukuteta Kwabafazi*）のように、それを指す固有の単語が存在するのだろうか。『金枝篇』の記述は、それを明らかにしてくれない。

フレーザーが依拠した資料は主に19世紀半ばのものであり、彼以後に「女言葉」を研究した論稿は寡聞にして知らない。ところが、ごく最近、周到な現地調査に基づいてこのテーマを扱った興味深い論稿が2篇発表された——小森淳子「ケレウエにおける個人名と忌避名」『スワヒリ&アフリカ研究』9, 1999a、小森淳子「言語におけるタブーと性差」『アジア・アフリカ言語文化研究』58, 1999b。

小森は、ヴィクトリア湖中にあり、タンザニア北西部に位置するウケレウエ島に住んでいるケレウエ（Kerewe）人を調査した。彼らの間では、女性が夫の父親の名前をそのまま口にするのはタブーで、別の特殊な名前に言い換える。例えば、Mafwele という男性名は、語幹（*fwa*, 死ぬ）がこれに対応する女言葉 *negeka* で言い換えられて *Manegeki* となる。同じく、*Mazigo*（語幹 *ziga*, 騙す）は *Malelembya*（語幹 *lelembya*）で、*Lulegu*（語幹 *legu*, 惨殺する）

はLunega（語幹nega）で置き換えられる。

夫の父親の名前ばかりでなく、その語幹をなす語も、またそれに近い発音の語も同様にタブーの対象となり、別の語に置き換えられる。ケレウェ語では、ある語を別の語で置き換えることをsindaといい、置き換えられる語も置き換わる語も共にensindoと呼ばれる。

ケレウェのいずれの人名からも何らかの意味が読み取れる。それは、人名「の中に普通の名詞や動詞などの語彙が含まれているから」だ。すると、人名に関するタブーと一般の語に関するタブーとが相互に浸透しあう状況が存在していると予想される。実際、小森は、幾つかの範疇に分けた200例ほどのエンサインドを挙げて精密に分析している [1999b]。

#### ■「女言葉」の起源

小森は、ケレウェの「女言葉」の起源は姻族間の、特に妻と夫の父親との間の忌避関係（respect - avoidance）に起因するという。つまり、妻は夫の父親の名前とその名前に含まれる語幹を口にできず、女性たちが代替語を徐々に蓄積した結果、やがてそれが「女言葉」となり、今日では丁寧語としても用いられるようになったと見るのだ。その根拠は、「女言葉」の語彙の個人的な変異の大きさにある——ただし、フレーザーの説もこの要素は折り込み済みだ。

妻と夫の父親の間の忌避関係が（ズルーの「二重言語」の女性版も含めた）「女言葉」の形成に関わる複合的な要因の一つであることは間違いない。だが、恐らく、「女言葉」の形成をそれだけで説明するのは無理であろう。

というのも、この忌避関係は、アフリカでは普遍的ともいえる現象だ。前回紹介した通り、フレーザーもマラウィ北部の女性は決して夫の名前もそれと同義的な語も口にしないと述べた。キブシギスやグシイを初め、ケニアの諸民族も同様だ。だが、そのどの集団にも複雑な「女言葉」と呼べるほどのものはなかった。

ところで、ケレウェと同じ湖間バントゥ群に属する近隣のジタ（Jita）人やカラ（Kara）人

の間にもエンサインドがある [小森1999a]。ここで、次の事実に注目しよう。ジタ人やカラ人にも妻と夫の父親の間の忌避関係があるが、その作法はケレウェ人ほど厳格ではない。彼らのエンサインドは通婚を含む長年の共存関係を通じてケレウェから浸透したもので、しかもケレウェ語の語彙をそのまま借用している [ibid]。

もう一つ注目すべきは、ケレウェでは17世紀に成立した王制がタンザニアの独立（1962）まで17代にわたって存続していた事実である。ケレウェ人の人口は現在約10万。百万単位の人口を誇るトランスバールのズルー人やコーサ人の規模には遠く及ばない。しかし、ウガンダのニョロ王国に端を発し、ンコレ王国と系譜が重なり合う権威のある王制が存在した事実は、社会の固い成層化と入り組んだ社会規範の発達を促したことを窺わせるに足るものである。

#### ■フレーザーの利点

複雑な「女言葉」が報告されているのは、差し当たり南部アフリカのコーサ人とズルー人、それにケレウェ人だけだが、これは——いずれもバントゥ語系言語の話者であるという以上の意味で——偶然ではあるまい。フレーザーが考えたように、王（民族次元）と首長（部族次元）の名前に纏わるタブーに姻族間（氏族次元）のタブーが絡む形で成層的に複合した言語状況の錯綜が、「女言葉」を生み出す決定的な圧力となったといえそう。小森は、一方ではケレウェの「女言葉」を日本の女房詞と比較し、それが普通の単語に取って代わる場合もあることを指摘している [小森1999b]。上の意味で、この推定の方がむしろ適切だといえる。

前回、私は子称の分析を例として、フレーザーの論理を思弁的だと批判した。しかし、こうしてみると、量的に厚みのある彼の通文化的な研究には、我々の集中的なフィールドワークに基づく研究の検討と整理に資する側面が確かにあることを認めなければならないだろう。

（こんま とおる 神奈川大学社会人類学）